

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

9

2017

特集 養殖業イノベーション考



特集

養殖業イノベーション考

3 日本に強みの技術でもうかる養殖業へ

奥澤 公一

魚の供給の担い手として発展させる必要がある養殖だが、そのカギとなるのが育種だ。日本における、世界に冠たる種苗生産技術とゲノム情報を利用する育種を紹介しよう

7 海外市場を見据えた認証で攻めの水産を

小川 直也

水産資源の枯渇が叫ばれる中、持続可能性を担保する「水産認証」が世界の水産物流通のキーワードだが、養殖漁業の認証「ASC」取得は困難なものではないと認証審査担当者は説く

11 未来の食料担う陸上循環型養殖の展望

遠藤 雅人

増える養殖生産だが、海洋汚染などで海洋天然水域での養殖は問題を抱える。そこで、産業的にも注目される「陸上循環型養殖」の将来像を探る

情報戦略レポート

15 6,000~8,000㎡に収益性ピーク 課題は安定生産と労働力の調達配分

—施設園芸(トマト)経営に関する調査—

経営紹介

変革は人にあり

23 新日鉄住金エンジニアリング株式会社／東京都 松原 淳一

鉄鋼企業の培ったノウハウを活かし、実証実験に成功し世界初の自動給餌システムを構築した海外展開も視野に入れるプロジェクトリーダーに聞く

経営紹介

33 株式会社オホーツク活魚／北海道 藤本 信治

高級品のイメージを払拭して、オホーツクの魚介類の価値を最大限に引き出し生活者に伝える。一念発起した漁業者は蓄養を強みに先進的な取り組みを展開する



撮影:豊田 直之
長崎県五島列島・福江島
2012年7月撮影

イナダの群れ

■ 潜水中、イナダ(ブリの幼魚)の大群に遭遇する。不意に暗くなった次の瞬間、周りを無数のイナダが勢いよく泳ぎ去っていった■

シリーズ・その他

観天望気

新漁業者1915人 小坂 智規 2

農と食の邂逅 10年目の再訪

有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊國屋/滋賀県
岩田 康子
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

耳よりな話 185

ウンシュウミカンの父と母
藤井 浩 26

主張・多論百出

社会活動家/Social Activist
森下 雄一郎 27

まちづくりむらづくり

有機の里づくりでヒノキの町を再生
有機農業を目指す人たちが移住
NPO法人ゆうきハートネット/岐阜県加茂郡白川町
西尾 勝治 29

書評

橘 玲 著
『読まなくてもいい本』の読書案内 知の最前線を5日間で探検する
宇根 豊 32

インフォメーション

新規就農者応援セミナー農林中金などと共催
宇都宮支店 35
「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者決定
情報企画部 35

食品製造・加工業者の皆さまへ(HACCP資金のご案内) 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第11回アグリフードEXPO大阪2018 38

10月号予告

特集はGAPを予定。
食品安全、環境保全、労働安全などの持続可能性を
目指した農業の生産工程管理の取り組みを考える。

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

望天 観気

新漁業者1915人

わが国の漁業就業者数は一貫して減少傾向にある。二〇一六年には前年から四%減少し二六万人(水産白書)となり、高齢化や担い手不足が叫ばれて久しい。漁業経営の大半は家族中心で、後継者はその子弟が大半であるが、必ずしも漁業を生業にするとは限らず、特に小規模経営体を中心に後継者不足が深刻化している。

一方で、生活や仕事に対する価値観の多様化から、漁業に関心を持つ都市出身者の若者も少なくない。こうした若者たちを後継者不足に悩む漁業経営体や地域とつなぎ、意欲ある担い手として育成することは、水産業の発展のみならず地域活性化の観点からも重要であることから、二二年、漁業者や関係団体との連携と協力により「全国漁業就業者確保育成センター」が開設された。センターでは「漁業就業支援フェア」を開催するなど、都市出身者で漁業に興味を持つ若者の漁業就労と地方定住をバックアップしている。

全国の新規漁業就業者数は〇九年以降、おおむね横ばいであったが、三年の一七九〇人から一五年には一九一五人(水産庁推計)とわずかだが増えており、明るい兆しといえる。また、四〇歳未満の者が七割を占め、こうした方が継続的に漁業に従事できる環境を整えることも重要である。そこでセンターでは「漁業カイゼン講習会」を開催し、漁業労働環境の改善に関する意識を高めると同時に、海難の未然防止に関する知識を持った「安全推進員」を養成し、漁業労働の安全性を向上させる取り組みを支援している。

また、新規就業者の確保には給与を含む待遇改善が欠かせない。「漁業就業支援フェア」出展者の求人票によると、最低でも年間三〇〇万円以上、また二〜三年目以降ともなれば漁業形態によつては五〇〇〜六〇〇万円の所得があり、決して低くはない。

さらに、漁業は海上での長期滞在や拘束時間の長さなど、他業種と異なる点が多々あり、きつい仕事というイメージがあるかもしれないが、鮮度抜群のおいしい魚を国民の皆さまに提供するためにも若い力が必要との考えから、作業の機械化が進み、安全対策にも工夫がなされ、風呂やシャワーを完備し衛生面についても配慮された漁船が増えている。漁業は捨てたものじゃない。

一般社団法人全国漁業就業者確保育成センター
代表理事会長

小坂 智規

こさか ともりの
1946年三重県生まれ。68年三重県立大学(現三重大学)水産学部卒業、69年同漁業専攻科修了。水産会社に入社し、北洋漁場、アフリカ沖合漁場操業後、陸上勤務。社団法人大日本水産会へ移籍後、課長、次長、部長を経て、常務理事として11年間勤務し2012年退任。同年より現職ならびに公益財団法人日本検疫衛生協会理事を兼務。



「農と食の邂逅」一〇年目の再訪
「農と食」に携わる
女性たち
「いのちの食」を物語る



岩田 康子 さん

滋賀県大津市
有限会社ブルーベリーフィールズ
紀伊國屋社長





P19:ブルーベリーの生産から加工、販売、レストラン経営まで手掛ける康子さん。2002年に法人化し、売り上げは約1.8億円 P20:長女の佳世さんは販売部門の責任者、剛士さんは生産部門の責任者を務める(右)「福祉と連携した農業も模索中」と語る剛士さん(左上)「ご飯としっかり向き合わないと日本人は駄目になります」と話す康子さん(左下)



ご飯に向き合う

岩田康子さん(六八歳)と二〇年ぶりの再会。場所は、滋賀県高島市安曇川にある「ソラノネ」と名付けられたレストランだ。琵琶湖を背に緩やかな坂を上っていくと景色が一変し、平らな畑が広がる。その一角に立っているのがソラノネだ。席に座り大きな窓ガラス越しに畑を眺めていると、不思議と心が穏やかになり、時間の経過も忘れるほどだ。

康子さんが「農業で生きていこう」と決めたのは三五歳の時だった。離婚し、二人の子どもを抱えての再出発。大津市内の標高八〇〇メートルという琵琶湖が一望できる山の中腹にある農地に、当時ほとんど知られていなかったブルーベリーを六五〇本植えた。自ら営業し販路を開拓する一方、ジャムの加工を始めた。その後、農地に隣接する自宅で、一日に一組限定のフランス料理を提供するレストランを開いた。火事で建物が全焼する惨事に見舞われたが、ブルーベリーの樹は焼けずに残った。「私にとっては片割れのような存在。再起する力をくれました」

新たなフレンチレストラン「山のレストラン」を構えたのは一九九六年。六次産業化という言葉もなかった時代に、一切のお膳立てもなく、「ゼロから形にしていく喜びをかみしめながら」前進していった。

その存在は周囲にも知られるようになり、二〇〇四年から山を下りた市内の成安造形大学のカフェテリアの運営を任された。同じ

頃、離農した地主から「うちの畑を借りてもらえないか」と相談が持ち込まれた。現在、ソラノネが立っている場所だ。

この地に、長男の松山剛士さん(四二歳)は一〇〇〇本のブルーベリーを植えた。畑の管理をしながら二人は「レストランを開こう」と考えた。だが、フレンチの二号店を出す気はなかった。バブル経済の頃のように、いくら高くても食べに行くという時代ではないことを実感していた。

愛媛県内子町での講演会に講師として呼ばれた時、康子さんの心は決まった。講演を聞きに来ていた女性から「うちに来ませんか」と招待され、台所にあるかまどでご飯を炊き、「はい、おだちん」と、おこげで握った小さいおむすびを手のひらに乗せてもらった。康子さんの心は震えた。「毎日暮らしている家の中にこんな豊かさがあったとは——」

以前から、若い人の食の乱れを感じていた康子さん。主食であるご飯ですら「三分でチン」の時代だ。「誰かのために時間をかけて作り、共に食べるという振る舞いが消えていくのをただ見過ごしていいのか、という思いがずっとありました」。手のひらのおむすびを見て、新たなレストランではかまどで炊くご飯をメインにしようと思った。「日本人の主食であるご飯にしっかり向き合おう。若い人の食生活を非難するのではなく、自分から実践しよう」。かまどで炊いたご飯を出すだけでなく、かまどでご飯を炊く体験もしてもらおう、とソラノネを〇八年にオープンした。



かまどのご飯炊き体験のガイド役は剛士さんだ。湧き水で米をとき、まき割りも体験してもらう。火加減を見て火吹き竹で空気を送る。

「お釜には米と水しか入れていないのに、ほーら、いい香りが出てきたでしょ」「チリチリという音が聞こえる？そろそろ炊き上がるといふサインだよ」と剛士さんは説明。炊き上がったご飯のおいしさはもはや言うまでもあるまい。「うちの子は食が細いのであまり食べないかも」という保護者の心配をよそに、大盛りのご飯を食べる子どもたちの姿がある。

東京の大学に進んだ剛士さん。「都会の暮らしも悪くない」とそのまま働くことも考えたが「外に出たからこそ、この良さが分かりました。『農業をやる』と言うと、友達が喜んでくれソラノネの準備にも力を貸してくれました」と笑顔で語る。

剛士さんの「樹を植えるところから自分でやりたい」という言葉に、康子さんは託す気持ちになった。「もし、

私がお膳立てした農場で、『経営だけならやる』との返事だったら、させてはいかなかった」と言う。「後継者自身にワクワクする気持ちがないと長続きはしません」

そんな康子さんを見て剛士さんは「失敗してもめげないところが創業者らしい。自分ならどうすれば失敗しないかを考えてしまおう」と苦笑いをする。方向性は同じでも手法が異なる二人。「毎日のように言い合っていますよ(笑)」と剛士さん。そんな剛士さんを頼もしく思う様子は、康子さんの表情から一目瞭然だ。現在、剛士さんはすでに「ワクワク」を形にしようとしている。「畑の一角に相撲をとる土俵を作る」という計画はその一つ。「ご飯が炊けるのを待つ間に体を動かして誰もが楽しむにはもってこいだと思っています」と剛士さん。土俵の製作費の一部はクラウドファンディング(注)で広く募るといふ手法を取り入れた。

目の前の幸せ

周辺の農家から「農地を買ってほしい」と言われ農地は次々に増え、同社の資本力だけでカバーできないほどになった。康子さんは京都に本社を持つある企業の経営者に直談判をし連携することになった。四診まで増えた畑にはブルーベリーだけでなく、綿花も植えた。「食以上に輸入への依存が高い『衣』でも何かできれば」と考えている。綿花の収穫は連携先の社員に手伝ってもらい、オーガニックコットンの産着やタオルに仕立てて、

社員に贈る計画も温めている。

康子さんは今、一生を掛けて取り組みたいことがあると言う。教育者で、福祉活動家でもあった故・佐藤初女さんとの出会いがきっかけとなった。初女さんは悩みを抱える人を青森県の岩木山麓の「森のイスキア」に招き、手料理による食事を共にしながら痛みを分かち合ってきた。九四歳で亡くなるまで康子さんとは数年間の交流だったが「心を通わすことができたように思います」と言う。

「良きことは伝えなさい」という言葉を遺言と受け止め、初女さんから学んだおむすびの握り方を伝える活動を各地で行っている。「幸せというものは、あんなところやそんなところではなく、目の前にあるもの。誰かのためにおむすびを握るといふ行為を通じて、それを伝えたいのです」

一〇年前の清楚な立ち居振る舞いはそのままだった。芯の通った女性経営者としての姿が強烈だった康子さんは、しかし今回、経営者という器からも飛び出し、本来の食の豊かさを訴える伝道師としての面も見せてくれた。次々に紡ぎ出される言葉には引き込まれるほどの勢いを感じた。静かなたはずなのに潜む、燃えたいぎるような情熱を持つ康子さんを師と仰ぐ女性農業者が多い。その理由を改めてかみしめた。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

注：アイデアやプロジェクトを持つ起案者がインターネットなどを通じて呼び掛け、共感者から広く資金を集める方法

● 10周年を迎えた連載『農と食の邂逅』

女性たちが「農と食」を物語り、「いのちの食」に出会う

「農と食」に携わる女性を訪ねて。 「花綵列島」を津々浦々へ。

『農と食の邂逅』一〇年目の再訪

大地に寄り添う「農と食」に関わる女性を訪ねて、女性たちを主人公にした生き方を紹介してきましたが、連載は節目の一〇年を迎えました。

ここに登場した二二〇人を超える女性たちはまさに百花繚乱、女性たちは光彩を放ち、女性たちの色濃い人生が誌面に描き出されています。例えば、一五歳の少女は近くの飛行場から飛び立つ特攻隊員を見送った。若い兵隊が死を承知で飛び立っていく様子を見ていた。その後、生きた足跡を残そうと農業を選んだ八二歳のウメ農家は、作物作りは一体になれば絶対に裏切らない、と。



さて今月号は、特別編として『農と食の邂逅』一〇年目の再訪を行うことにいたしました。いわば「農と食」の足跡をたどり、一〇年目の定点観測という試みです。

登場する今回の主人公は（前三ページ）、シリーズが始まった一〇年前、「農業で生きて

いこう」と就農を決意した新規就農者です。三五歳の就農で、主人公が経営の柱にしたのがブルーベリーでした。当時はあまり知られていない果樹で、経営作目としては未知の領域でした。新しい作目の選択でしたから、暗闇の中で手探り状態のスタートでした。

しかも主人公は、離婚して二人の子どもを抱えた境遇からの再出発でした。主人公にとって農業の選択は、人生を切り開くものでした。ブルーベリーを自ら営業販売しながら販路を開拓し、後にジャム加工を始め、ブルーベリー農園を眼下にした隣接地にフレンドレストランをオープンします。

「ブルーベリーは私にとって片割れのような存在です」。そのように主人公は語ります。小さな果樹の実が「いのちの食」になりました。今、成長した二人の子どもとともに食のつながりが広がっています。主人公のブルーベリー園は、スイスのレマン湖を彷彿させる琵琶湖西岸の小高い山の中腹にあります。



「邂逅」とは、思いがけない出会いによるこ

びを意味する言葉です。連載開始の一〇年前、私たちは「農と食」への思いをこの連載タイトルに置きました。「食」は人間にとって生命の根源ですし、至上の喜びをもたらしてくれます。そして「農」は、「いのちの食」に深く関わり、それに携わる人たちがそれを支えています。

食べ物を生産する農業者を神の使者だと言った人がいます。農業者は畑の医者だと言った人もいます。

一九九九年。「食料・農業・農村基本法」が公布、施行された同年に、「男女共同参画社会基本法」が制定され、その後、女性チャレンジ支援策などの女性を後押しする社会づくりが進められています。

女性を主人公にした企画はそんな時代にシンクロしています。

主人公の女性たちによって、どのような邂逅がそこに生まれるのか、これからも「農と食の邂逅」は次の一〇年へ、続けていくつもりです。

（連載一〇周年に当たり、編集長）



ウンシュウミカンの父と母

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 果樹茶業研究部門
カンキツ研究領域 カンキツゲノムユニット 首席研究員

藤井 浩

ウンシュウミカンは、わが国で最も親しまれている果物の一つです。これは食味が

良い、種子が少ない、果皮がむきやすい、機能的な関与成分が多いなどの果実形質の他、高収量で病害虫に強いなど、わが国の気候に適した優良品種だからです。このため、明治時代中期に栽培が本格化してから一〇〇年以上の間、わが国のかんきつ生産の中心となっています。ところが、ウンシュウミカンは人為的な育種で生まれたのではなく、在来品種であったので、その起源は分かっています。

かんきつ学者の田中三郎博士は、ウンシュウミカンの起源について研究を行い、中国のかんきつ産地にはウンシュウミカンが存在しないことを調査した上で、中国のかんきつである本地早、早橘、慢橘などの品種がウンシュウミカンの親ではないか、そして、その種子が鹿児

島県長島でまかれて、ウンシュウミカンが生まれたのではないかと推定しました。この説は、一九二七年創刊の学術雑誌『柑橘研究』に発表されましたが、両親の特定には至りませんでした。

農 研機構果樹茶業研究部門では、かんきつの育種や品種識別を目的としたDNAマーカーを開発している他、かんきつの遺伝資源を保存しています。そこでDNAマーカーを多数の遺伝資源に適用し、ウンシュウミカンの

両親として矛盾がない遺伝子型を持つ遺伝資源の組み合わせを探しました。

その結果、キシウミカンとクネンボという品種の組み合わせのみが、ウンシュウミカンの両親として矛盾がないことが分かりました。さらに、父母を判別する解析を行い、母親がキシウミカン、父親がクネンボであると解明し、二〇一六年に日本育種学会英文誌に発表しました。田中博士の発表から九〇年を経て、前述の中国



母親：キシウミカン(左上) 父親：クネンボ(右上)
ウンシュウミカン(下)

のかんきつがウンシュウミカンの親ではないことが明らかとなったのです。

また、中国原産のキシウミカンもインドシナ原産のクネンボも、ウンシュウミカンが誕生する以前からわが国に存在したと推定されるので、ウンシュウミカン誕生のための交配が、わが国で起こったとしても矛盾はなくなりませんでした。

母親のキシウミカンは果実が小さく多くの種子が入り、父親のクネンボは果皮に松やにのような独特の臭気があります。このような欠点を持つ二品種の子どもとして、優れた形質を持つウンシュウミカンが自然に生まれたことに偶然の不思議さを感じます。

近代育種では果皮の臭気を理由にクネンボを育種親にしませんでしたが、ウンシュウミカンの両親が分かった今、優れた形質を持つウンシュウミカンの兄弟品種の育成が期待されます。

F



Profile

ふじい ひろし
1958年静岡県生まれ。農学博士。静岡大学大学院農学研究科修士課程修了後、84年農林水産省果樹試験場入省。バイオインフォマティクスを基盤に果樹のゲノム研究に従事。マイクロアレイやDNAマーカーの開発・解析、品種識別技術開発などを担当。

社会活動家 / Social Activist

森下雄一郎

(四〇歳)



● もりしたゆういちろう ●
一九七七年兵庫県生まれ。高校卒業後に
単身渡米し、二〇〇九年まで約二年間に
渡り世界を巡る。帰国後、国や大企業を巻
き込んだ中高生の「志」を育てる「全国プ
ラットフォーム」を構築。現在は、「地方崛
起」という、全国二〇〇過疎地域の担い手
たちを主役とした官民一体型の「ダイナ
ミック・プラットフォーム」の構築を目指
し活動している。公式HP: <https://www.send-to2050.com/>

僕

は地方創生の第一歩目は、「地元

の青年・若者の活力を創り出す」ことが最優先だと感じ、「過疎地域の青年・若者の活力の創出」を目指した事業の構築に取り組んできました。

活動の一つとして、過疎地域内で若者たちが力を合わせ郷土おこしに参画する場「地域別プラットフォーム(チーム)」を宮崎県串間市で構築し、二〇一六年に串間市の担い手の皆さんと意見交換をして、一〇人の有志と共に「串間崛起」を発足しました。今後三〜五年で一〇〇人規模の「串間崛起の一〇〇アクション」を実現し全国へ発信していくことを目標にしています。

もう一つの活動は、今年から四年後を目標に、これまで培ったノウハウやネットワークを最大限活用し、全国二〇〇過疎地域の担い手が主役となる場「全国プラットフォーム」の構築です。

行政による全国的な広域交流や事業などは以前からありましたが、各地域の担い手たちが中心となって、他地域と交流・連携・協働ができる仕組みをつくれれば、

これまでにないダイナミックな地域連携型の広域協働企画や実践をはじめ、全国への発信力が高まります。また、各地域の担い手がこのプラットフォームへ参加することで、日本全体に視野が広がり各地域で活動を起こす人材の育成にもつながると考えています。

僕は高校卒業後、日本人初の米NBA選手を夢見て一九九七年に単身渡米し、プロバスケット選手として米国を拠点に世界各国を巡り、二〇〇九年に現役を引退し帰国しました。社会活動に関心を持つきっかけとなったのは、米国での下積み時代にビッグパパと呼ばれた黒人のおじいさんとの出会いです。「自分のルーツである日本の誇りを語れない人間は仲間として認めない」という彼の言葉に衝撃を受けました。僕は母国である日本について全く語るできませんでした。いつしか自分の存在意義や、世界における日本人の役割、世界の課題などに目が向いていき、帰国した〇九年に、「これからの日本を支えていく『志』を持った人材を育て、二〇五〇年により良い未来を届けるために

さまざまな社会課題の解決」を行っていきこうと「SENDto2050 PROJECT」を設立しました。

関西の教育機関と連携し、中高生の志を育てることを目的に活動をスタートし、一年の東日本大震災後から一四年までは東北を拠点に全国へと広げてきました。各地域の自治体、教育委員会、企業などと連携し、中学校・高校の生徒会役員が主体となる「生徒会サミット」をはじめ、「全国生徒会サミット」を開催し、地域特産物のPR活動や地域一体での防災訓練などを実践し、全国に広がっていきました。その結果、文部科学省、二九都道府県、二三七の自治体、三七企業、音楽界、スポーツ界、芸術界から一七組のトップランナーを巻き込み、延べ一七〇〇校、一〇万人以上の中高生が参加する「郷土への誇りと志の育成」中高生による地域参画」を目的とした官民一体の活動の場「生徒会プラットフォーム」構築へとつながっていきました。

の活動を通じて連携してきたところの多くが過疎地域であり、過疎化が一地域のことではなく、日本全体の重要課題であると知ると同時に、過疎地域でのさまざまな出会いも増えました。その中で感じたのは、郷土創生に向け熱く語り、行動を起こそう

とするリーダー的存在の若者が増えにくい地方特有の閉そく感の環境であることです。

そこで一六年、全国一三の過疎市町村の担い手の皆さんと僕たちが貢献できる内容について意見交換を行いました。特に焦点を当てたものが、過疎地域の若者たちの活力の創出として前述した「仲間崛起」などの「地方崛起」の活動です。これからの地方創生には、「チームのチカラ」が必要です。日本の未来のために地方を応援していく。その想いや関心を集め、地域やさまざまな業種などの垣根を越えて、力を合わせて地方創生に関わる「場」が地方崛起という「全国プラットフォーム」なのです。

地域を超えて同様の「志」を抱き、同じ境遇の中で挑戦をしている「仲間」がいることは、大きな精神的な支えになり、他地域の同志と出会い、情報交換や連携・協働をしていける「場」を目指したいと思っています。

過疎地域に住んでいる同世代が、とにかく「夢」や「希望」を抱き、「挑戦」をしているさまを知ったとき、そこに多くの人が引き寄せられてくると考えています。そして、地域おこしのために行動する「カッコ良い」若者たちが、中高生の憧れる存在となることが僕の願いです。F

郷土創生を熱く語り、行動する若者の 出会いと協働プラットフォームが必要



有機の里づくりでヒノキの町を再生 有機農業を目指す人たちが移住

岐阜県加茂郡白川町

NPO法人ゆうきハートネット事務局長

西尾 勝治



オーガニック朝市が出会いの場

「岐阜の白川」といえば、大半の人たちは、世界遺産の白川郷という豊かな観光資源を持った飛騨の大野郡白川村のことを思い描かれると思います。しかし、私どもの住む白川町は、同じ「白川」でも加茂郡白川町のこと、全く別なものです。県南部の美濃地、木曾川上流域の中山間地域にあり、町の九割近くが山林であることから以前は銘柄材「東濃ヒノキ」の中核的な生産地として林業が盛んでした。

一九年前、「かつてヒノキで栄えたこの町をこれから有機農業で活性化させよう」との共通の想いを持った私たち町内の意欲的な農業仲間が集まって、任意の団体「ゆうきハートネット」を立ち上げました。それ以降、「有機の里づくり」として有機農産物の生産以外に、有機農業を目指す若者の相談にのるなどコーディネーター役となってきました。その結果、多くの出会いに恵まれ、何と家

族を合わせて五〇人近くの有機農業を目指す移住者を迎えることができました。今や、彼らは町の大きな活力となってくれています。

毎週土曜日の午前中、名古屋市中心部の公園オアシス21はいつも人でぎわいます。「オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村」というオーガニックに特化した朝市が開かれるのです。この朝市こそ、有機農業を志す者と私たち「NPO法人ゆうきハートネット」のメンバーが出会う場所です。

朝市は、有機農業をやりたい人たちからの相談を受ける窓口を開設しており、この朝市に出店している私たちは数多くの人から相談を受けてきました。白川町の移住者の多くはこの朝市で出会った人たちです。

最初に移住してくれた人は、三〇歳代のデザイナー兼建築家です。彼は、わらブロックを壁材にするストロベイルハウスを造るのに農業をつかわずに生産されたわらを探している、と朝市に相談にきました。そこで私たちは、白川町で無農薬わ

らを提供できると伝え、わらを提供し始めました。すると彼は販売ネットワーク「はさがけトラス」をつくり、事務局として白川町の米の販売を手掛けるようになってくれました。毎週のように名古屋から通っていましたが、白川町を気に入り移住、現在、田んぼ二反で稲を有機栽培しています。

一・五畝で、一年間に五〇種類もの野菜を生産し、セットにしてレストランやインターネットで消費者に直接販売をしている新規就農者もいます。また、他の移住者の中には、有機農業をする一方、定期的に白川町で都市住民相手に食農教育講座を開いている人がいたり、妻が農家レストランを自宅で開いたりしている人もいます。さらに、大手種苗会社に勤務した経験のある移住者は、白川町で堆肥を作る事業を興し、また、苗を生産、販売しています。

このように白川町へのイターン新規就農者は、有機農業で農産物を生産する以外にも有機農業

profile

西尾 勝治 におまさはる

1945年白川町生まれ。東京教育大学農学部卒業後、名古屋市で高校教員を経て39歳の時にUターン、農業に兼業で従事する。2000年、55歳で有機農業専業農家として西尾フォレストファームを設立。経営規模は、水稲50%、畑作80%の他、シイタケの原木自然栽培でホダ木1万本、山林10%。NPO法人ゆうきハートネット理事(事務局担当)。任意団体設立時からのメンバーとして、有機の里づくりに取り組んでいる。

NPO法人ゆうきハートネット

1998年有機農業の推進で町の活性化を目指そうと農業仲間10人で任意団体ゆうきハートネットを立ち上げ、2011年NPO法人化。有機の里づくりを目指し、現在、生産技術、経営面での技術向上のための事業、消費者との交流などで農業への理解を深めるための事業、新規就農者の参入促進と町内定住を支援する事業、有機農産物の販売促進事業を展開している。

で自身のやりたいことを実現しているように思っています。Iターン時の新規就農者のほとんどが三〇歳代です。名古屋圏または東京圏の企業エリートからの転身が特徴です。

新規就農者相互の情報交換や交流もとても盛んで、しようゆやみそ作りなどを共同で行うなど協力し合っており、また、彼らの消防団活動などを通して地域に積極的に溶け込もうとする姿勢は地元住民の好感を呼んでいます。

定住促進へ三つの支援

ゆうきハートネットではこのような新規就農者の参入促進と町内定住を支援しようとする三つの取り組みを主に行っています。

一つ目は、畑や田んぼ、家のあつ旋です。空き家

や担い手を探しているなどの情報は、現在四〇人いるゆうきハートネットの会員から事務局である私に集まります。以前、会員が身内の法事で親戚が集まった際に、親戚から担い手を探していると相談された家と畑が、Iターン就農希望者の栽培希望作物など条件がマッチングし、すぐに売買にいたったという事もありました。さらに会員は、賃貸交渉を行ったり隣家へのあいさつは一緒に行くなど細やかな支援をしています。地元住民も地域の篤農家としてあるいは地域の役職活動をまめにこなしている会員の仲介であれば安心して任せられることができます。今、後継者を持たない昭和一ケタ世代農家のリタイアの時期に重なっておりますが、耕地を休耕で荒らしたくない農家と耕作地を求める新規就農者をいかにうまく結び



上: オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村
下: ある新規就農者は都市住民へのグリーンツーリズムを企画している

付けるのが重要な課題です。

白川町では条例で、空き家バンクに登録された空き家付き農地は一ヶ月から購入可能と決められていることも、新規就農者の参入を促し町内に定住してもらえる大きな理由の一つでしょう。

二つ目は、研修制度です。岐阜県の就農支援研修に「あすなる農業塾」という制度があります。白川町の有機農業では私を含め三人の農業者が、この講師であるあすなる塾長の資格を持っています。白川町では二〇一〇年に研修施設「くわ山結びの家」が完成しており、塾生はそこで宿泊をし、塾長の元へ通うことができます。また、町からの補助金を受けて就農者の生産技術、経営面の技術向上のために、年二回、著名な農学者や実践者を招いての講演会や研修会を開催し、さらには、就

農者に先進地の視察をさせています。

三つ目は、販売先の確保です。新規就農者にとっては生産物の販売先確保が大きな課題です。私たちは以前から大豆の販売組織「大豆畑トラス」や米の販売組織「郷蔵米生産組合」などを設立し、名古屋市の消費者団体などに直接販売しています。これらに加入することにより、取りあえずの売り先が確保できます。

かつてはヒノキで栄えた町

ここで私たちの活動のきっかけを振り返りたいと思います。以前、白川町はヒノキを中心とする林業で栄えており、さらに、高級茶として知られてきた白川茶が農林業の基幹産業としての役割を果たしていました。しかし世界のグローバル化が進む中で、良質でも価格の高いヒノキ材は安い外国産木材に圧倒され、価格の低迷にあえいでいます。また白川茶も大衆の嗜好の変化により衰退傾向が続いています。

二〇年前にはこのような地域経済の低迷に伴い、若者の多くは地域を離れ、典型的な過疎地域となっていました。しかしながら、町は山紫水明で豊かな自然が自慢の私たちの大切な故郷です。そこで、なんとか衰退を食い止めたいと農家仲間と任意団体を立ち上げました。折から、名古屋の消費者グループより「安全・安心な米をつくってほしい」と要望を受け、私たちのつくった減農薬の米を提供したところ大変喜んでいただけました。

このことがきっかけになり、有機稲作に本腰を入れて取り組もうと決めたのです。木曾川上流域

の水源の里として豊かな水と自然を守る責任があると考えた私たちと寒暖の差がある気候の白川町に、有機農業は適したものだと思いました。

二〇〇四年より、当時優れた有機稲作技術で全国的に知られていた「民間稲作研究所」の稲葉光圀先生の書かれた書籍をテキストにして、種もみの温湯消毒から播種までは共同作業で、以後の育苗管理は個々に取り組みお互い情報交換を欠かさず有機稲作の技術を一年がかりでマスターしていきました。そして、おいしいお米を収穫することができました。販売は、会員ごとに行いました。郷蔵米生産組合による直接販売などで販路探しに困ることはありませんでしたが、消費者団体からの情報をもらい、新たな取り組みとして、私は名古屋市中心部の公園で毎週土曜日に開かれる朝市「オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村」へ出店を開始したので。

この後、白川町に大勢の有機農業を志す若者たちと出会い、移住を促進させてきたことは前に記載した通りです。

就農希望者の増加で新たな課題

新規就農者の増加に伴い新たな課題も出てきました。一つは、新規就農者の生産物の新たな需要の開拓です。二つ目は、研修者が町内の別の地区で研修するためには移動に時間がかかるため、地区内に新たな研修者の宿泊施設を設置することです。前者については、名古屋圏で有機農産物を扱う大手のスーパーマーケットからゆうきハートネットの名でグループ出荷の提案があり、これにこたえるべく新規就農者の主導により体制

づくりが検討されています。単なる農産物の取引に終わらせることなく、行政を巻き込んだ地域づくりの運動として双方の想いを実現すべく進めようとしているところです。後者については当初、空き家古民家を改装した施設の計画を町当局に出したところ、国の地方創生事業をからめて予算を獲得することができ、結果として今年度中に完成予定です。研修・交流のための広いワークスペースや農産物の加工施設を含めた新施設として利用したいと思っています。

「有機農業をやりたい。やっとなら相談先が見つかった」。朝市で会う相談者は口をそろえて言います。行政に相談にいったら、有機ではもうからないと他の高収益作物を勧められるということもあるようです。そんな中であって、実際に有機農業で経営を成り立たせている白川町の農業者や先輩就農者の存在を知るので、その活き活きとした様子を見て、また、住み心地の良い住居と田畑があり、有機の最新技術が学べ、さらには移住者同士のつながりや篤農家からのフォローもあることを知り、白川町を魅力的と感じてくれるからこそ、移住者が多いのではないかと考えます。

東京オリンピック開催を控え有機農産物の増産が緊急課題となっています。しかし、国内の有機農業の生産面積は〇・四％。一方、町内の有機農家と耕地面積は六・五％を超えて岐阜県内でも注目される存在となっております。

有機農業の推進で地域活性をキーワードに進めてきた私どもの活動は若いイターン就農者たちに引き継がれ次の新しいステップを迎えようとしています。

『「読まなくてもいい本」の読書案内
知の最前線を5日間で探検する』

橘玲 著



(筑摩書房・1,600円 税抜)

ここまで世の中の見方が変わったか

宇根豊

(百姓・思想家)

書評で取り上げる本の基準は、その本によって自分の考えが揺さぶられ、一歩先が見えたと思う本だ。この本は、そういう思いを一冊で五冊分以上もできたが、少し複雑な気持ちだ。

五つのテーマが並んでいる。1 複雑系、2 進化論、3 ゲーム理論、4 脳科学、5 功利主義。いずれも近年の論壇を騒がせている話題だが、私たちは内容を知っているようで、ほんとうはよく知らない。そこで本を読もうとすると、「読まなくていい本」が多すぎて、時間の無駄になる。

二十一世紀になって、これらの五つのテーマで、世の中の見方は大きく変わった。しかし評判はよくない。なぜなら、それまでの素朴な感情を逆なでするからだ。著者は断言する。「それ以前の知は古く、読む価値はない」と。たしかに自分の考えが、もう古いことに気づくと戸惑う。

例えば、これまでの経済学が評判が悪い理由はその前提に「合理的経済人」をおいているからだ。進化論やゲームの理論では、人間はむしろ不合理な選択をすることが証明されている。つまり不合理な選択を前提とした経済学が生まれているのだ。これには驚くしかない。

あるスーパーではレジ袋一枚に二円加算されるが、買い物袋を持参する人は少ない。そこでレジの手前にレジ袋を置いて、必要な人は買い物袋に入れるようにしたら、買い物袋を持参する人が増えたそうである。これを「進化論」で説明すると、ヒトが得よりも損に敏感に反応するように進化したからだそうだ。したがって、「きわめて合理的」ということになる。

著者は進歩や発展に肯定的だ。「ひとはユートピアを描かずには生きていけない。明日が今日と同じなら、そんな世界にどんな意味があるのだろうか」と言う。この文章の前半には賛成だが、後半には首をひねりたい。

農業とも密接にかかわる問題が多い。脳科学では、無意識の状態でも脳が活発に働いている事例がいっぱい報告されている。私などは、「無意識に」生産性を落とす事例に興味を湧いた。害虫と天敵にゲームの理論を使うのも面白い。

たしかに、これら五つのテーマを農に当てはめて、農の見方を一変させる人物が現れるのは時間の問題だろう。その時に、私は大いに賞賛しながらも、「きみが見ているのは、世界の半分に過ぎないよ」と助言するだろう。

読まれてます 三省堂書店農林水産省売店 (2017年7月1日~7月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 ルポ 農業新時代	読売新聞経済部／著	中央公論新社	860円
2 JAに何ができるのか	奥野 長衛、佐藤 優／著	新潮社	1,200円
3 協同組合の源流と未来 相互扶助の精神を継ぐ	日本農業新聞／編	岩波書店	1,800円
4 稼げる農業 AIと人材がここまで変える	日経ビジネス／編	日経BP社	1,200円
5 食料・農業・農村白書 平成29年版 (平成28年度食料・農業・農村の動向 平成29年度食料・農業・農村施策)	農林水産省／編	農林統計協会	2,600円
6 農林水産六法 平成29年版	農林水産法令研究会／編	学陽書房	14,000円
7 アグリビジネス進化論 新たな農業経営を拓いた7人のプロフェッショナル	有限責任監査法人トーマツ・ 農林水産業ビジネス推進室／著	プレジデント社	1,500円
8 スマート農業 農業・農村のイノベーションとサステナビリティ	農業情報学会／編	農林統計出版	4,000円
9 農業と農政の視野／完 論理の力と歴史の重み	生源寺 眞一／著	農林統計出版	1,800円
10 ITと熟練農家の技で稼ぐ AI農業	神成 淳司／著	日経BP社	1,800円

新規就農者応援セミナー 農林中金などと共催

J A 栃木青年部連盟顧問の富貴澤孝澄氏が「農業で生きていくということ」と題して講演、その後、関係機関から就農支援の各種施策について情報提供がありました。

富貴澤氏は、地域コミュニティーで成り立ち消費者とのつながりが不可欠な農業では、積極的に自己アピールして自身を知ってもらい、地域・組織に溶け込む、仲間と支え合うことなどが大切だと力説。

参加者からは、「就農に当たって心掛きたい」などの感想が寄せられました。七月二十四日、於：宇都宮市、参加者：就農者など一三二人

(宇都宮支店)



富貴澤氏の講演は新規就農者への力強いエールとなりました

「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者決定

「アグリフードEXPO輝く経営大賞」は地域の農業・食品産業の担い手としてふさわしく、「アグリフードEXPO」への出展をきっかけに、優れた経営を実現している経営体を表彰することにより、多くの経営体の目標となる姿を示し、もって地域の農業および食品産業の育成に寄与することを目的としています。

本賞は、日本公庫農林水産事業(旧農林漁業金融公庫)が2005年度に創設しました。

全国の日本公庫各支店から経営大賞候補者の推薦を受け、社外の有識者で構成する選定委員会における審議の結果、2017年度東日本・西日本エリアで、それぞれ「大賞」「優秀賞」を決定しました。

■「大賞」受賞者

東日本エリア	有限会社 ジェリービーンズ (代表取締役 内山 利之 氏)	千葉県香取郡多古町	養豚・豚肉加工 (母豚1,800頭)
西日本エリア	農事組合法人 秋香園 (理事長 山口 茂徳 氏)	福岡県三潴郡大木町	きのこ (年間出荷1,230ト)

■「優秀賞」受賞者

東日本エリア	有限会社 岩瀬牧場 (代表取締役 岩瀬 剛巳 氏)	北海道砂川市	酪農・乳製品加工 (飼養頭数200頭)
西日本エリア	株式会社 小林農産 (代表取締役 小林 光男 氏)	三重県多気郡明和町	稲作・コメ加工 (200㍏)
	株式会社 オキス (代表取締役 岡本 孝志 氏)	鹿児島県鹿屋市	野菜・野菜加工 (100㍏)

■選定基準

優れた経営能力、技術力、実績を有するとともに、アグリフードEXPO(東京・大阪)への出展をきっかけに、売り上げ増加、販路拡大、消費者ニーズの把握、商品開発などを実現した経営。

■選定委員(敬称略)

大泉 一貫(会長)／宮城大学名誉教授 青山 浩子／農業ジャーナリスト 梅本 雅／農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター所長 荘林 幹太郎／学習院女子大学国際文化交流学部教授 藤田 毅／有限会社フジタファーム代表取締役 松田 恭子／株式会社結アソシエイト代表取締役 森 剛一／アグリビジネス・ソリューションズ株式会社代表取締役・税理士

※「輝く経営大賞」受賞者紹介および関連企画は本誌12月号と1月号で掲載予定です。

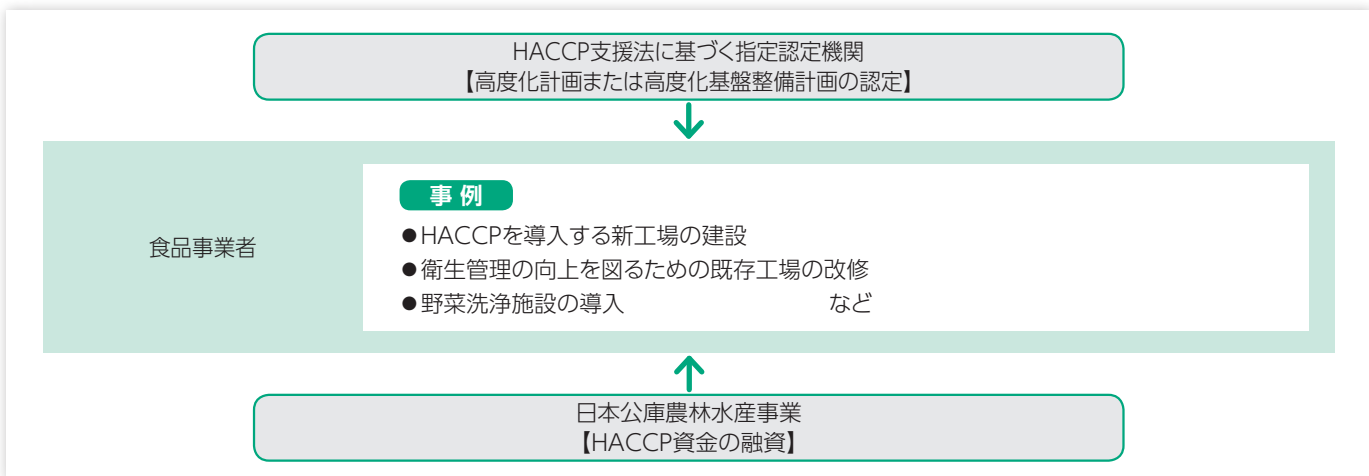
製造過程の衛生・品質管理向上のため、 HACCP資金をご活用ください

食品の安全性の向上と品質管理の徹底を図るため、製造・加工の工程管理システムであるHACCPの重要性がより一層増しています。EU、米国をはじめ、HACCPの考え方による衛生管理が国際的にも主流となっており、輸出促進の観点からも対応が求められています。



日本公庫はHACCP支援法に基づく制度資金「食品産業品質管理高度化促進資金（通称:HACCP資金）」により、HACCP導入などの取り組みを支援しています。当資金はHACCP導入のための施設整備や、HACCP導入の前段階における衛生・品質管理のための施設の整備などにご利用いただいています。ぜひ最寄りの支店までお気軽にご相談ください。

■ HACCP資金のご融資イメージ



■ HACCP資金の概要

ご利用いただける方	食品の製造・加工の事業を行う中小企業者（製造業の場合、資本金3億円以下または常時従業員数300人以下）
資金の使いみち	① HACCPを導入するための施設整備（製造過程の管理の高度化）またはHACCP導入の前段階における衛生・品質管理のための施設整備（高度化基盤整備）など ② ①と併せて一体的に導入する生産施設の整備
融資限度額	事業費の80%以内または20億円のいずれか低い額
返済期間	10年超15年以内（うち据置期間3年以内）
金利 (8月21日現在)	2億7,000万円以下 0.35%以内 2億7,000万円超および生産施設 0.50%以内
ご留意いただきたい事項	1 HACCP支援法に基づく各指定認定機関の認定対象の食品の種類は以下の通りです。 食肉製品（ハム・ソーセージなど）、容器包装詰常温流通食品（缶詰、瓶詰、レトルト食品）、炊飯製品、水産加工品、乳製品、味噌、醤油製品、冷凍食品、集団給食用食品、惣菜、弁当、カット野菜、食用加工油脂、油糧種子食品（すりごまなど）、ドレッシング、清涼飲料水、食酢製品、ソース、菓子、乾麺、漬物、生麺、パン、食肉（枝肉・部分肉、と畜）、精米 2 審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 3 上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル(0120-154-505)または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

♥私は以前、毎月送られてくる『AFCフォーラム』を単なる企業のPR誌だと思い、流し読みする程度でほとんど関心がありませんでした。しかし、会社を退職し、稲作專業農家の後継者として米作りに取り組みようになってからは、本誌を読む私の視点も変わったような気がしています。

本誌は私に「経営紹介」など身近な情報から、時宜になかった「特集」の記事まで、今まで知らなかった農業の知識を広めてくれます。

両親と共に二十数年のひととめぼれ特別栽培米作りに精いっぱい毎日ですが、本誌からの情報も活かしながら、笑い声の絶えない地道な日々の生活と自然豊かな環境に生

きがいを感じています。これからも有意義な情報を期待しています。

(若手県胆沢郡 高橋玲華)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所・氏名・年齢・職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

【郵送およびFAX先】

〒〇〇〇〇〇〇四
東京都千代田区大手町一―九―四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三―三三―七〇一―三五〇

編集後記

④最近、養殖魚の味が格段に良くなってきたように思います。中には、陸上の家畜同様に餌や飼育環境を追求し、ブランドとして認知されている例も見られます。日本が持っている技術を活かせば、世界に太刀打ちできる養殖業の未来像が見えてきました。世界中で、メイドインジャパンのフィッシュが味わるのも夢ではありません。(嶋貫)

④出会いは突然で、そして偶然でもあります。「多論百出」の森下さんは、バスケットに夢中になり、渡米してプロで活躍した方。その中で、巡り合ったビッグデータの「自分のルーツである日本の誇りを語るのか？」との問いをきっかけに、若者の活力創出の活動にまで発展させていきました。出会いは大切。二〇五〇年、「地方崛起」は「地球崛起」に！(小形)

④「農と食の邂逅」が一〇周年です。過去の記事を読み返してみました。登場した女性たちは、考え方、生き方も異なり、まさに百人百色。でもその女性にしか出せない輝きを全員に感じます。

花綵列島とは日本の形状を表す言葉ですが、登場した女性を花に例えたら、日本には多種多様な美しい花が咲き誇っています。(城間)

④九月に入りさまざまな種類のミカンを店頭で見かけるようになりました。「せとか」「はれひめ」「紅まどんな」など、日本の品種改良の技術の高さに感心します。そんな中、日本で偶然に生まれたウンシユウミカンが日本で一番多く栽培され、おいしくて食べやすく健康にも良いと、今でも多くの人に親しまれていることに不思議を感じます。(上原)

AFCフォーラム Forum

編集

嶋谷 元 嶋貫 伸二 清村 真仁
中田 さと美 柴崎 勇太 小形 正枝
城間 綾子 上原 理恵子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食
をつなぎます。

第11回 **アグリフード EXPO** 大阪 2018
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月21日(水) / 22日(木)
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



養殖業イノベーション考



『ざっこくのアマランサスが実ったよ』山館 瞬 岩手県軽米町立軽米小学校

■AFCフォーラム 平成29年9月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻6号(805号)
 ■発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売／株式会社 日本食糧新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南楼7F Tel.03(3432)2927 ■定価514円 [本体内格476円]

